

玉川上水・野の花だより No. 30

皇居東御苑における意見交換会（武蔵野の杜について）

中央大学研究開発機構・機構教授 東京大学名誉教授

石川 幹子

2026年 7月17日

7月16日、猛暑の中、渋谷区土木部の皆さんと「第25回玉川上水緑道整備にかかわる意見交換会」を、皇居東御苑において行いました。玉川上水緑道再整備にあたりましては、日本イコモス国内委員会が2026年1月5日に提言¹⁾を発しており、渋谷区におかれましては「玉川上水の歴史や文化資産の保全・継承にむけて、地域の皆様や専門家と意見交換を重ねて、今後も皆様のご意見を大切にしながら事業を推進してまいります」²⁾と公式見解を発表しておられます。

今回は、その柱となる「生物多様性と武蔵野の杜」について、学習することを目的といたしました。対象地を皇居東御苑としたのは、もともと馬場であった所に、昭和天皇の御意志により、あらたに「二の丸雑木林」が創り出されたもので（写真1,2）、整備時期は玉川上水緑道の整備時期（昭和57年度～60年度）とほぼ同じ、昭和58年に着工、昭和60年に竣工しています。

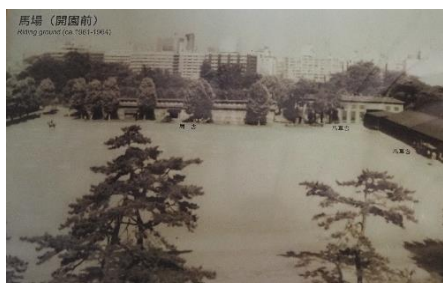


写真1 東御苑整備前：馬場

（昭和36～39年、二の丸雑木林・休憩所 展示写真）

写真2 現在の二の丸雑木林

（2026年7月16日）



写真3 初台緑道（写真集『昭和のしぶや』）

写真4 初台緑道（伊東小橋）2025年9月

ともに、整備から約 40 年以上が経過した「ゼロからスタートした森」を、改めて比較することは、大変、意義のあることです。渋谷区の都市林（初台～代々木）は、都心にあって奇跡的に育てられてきた「優れた都市林」です（写真 3, 4）。

約半世紀の軌跡と今後の展開について、双方を検証しながら考察いたします。「野の花だより No. 30」では、二の丸雑木林について、森の特色と現状について、ご紹介いたします。



写真 5 二の丸雑木林・学習会

2026 年 7 月 16 日（渋谷区土木部の皆さんと）

1. 皇居東御苑・二の丸雑木林の半世紀

皇居東御苑は、昭和 35 年 1 月 29 日の閣議決定に基づき、旧江戸城本丸、二の丸及び三の丸の一部を皇居附属庭園として整備されたもので、全体の面積は約 21ha です。昭和 36 年に着工し、昭和 43 年 9 月に完成しています。天守台、二の丸庭園、三の丸尚蔵館等があり、海外からも多くの人々が訪れています。このうち二の丸雑木林は庭園ではなく、かつては、どこにでもあった雑木林で、面積も約 2ha 程で、苑内の掲示板には次のように記載されています。

「昭和天皇の御発意により東京近郊から失われていく武蔵野の雑木林を皇居内に造ろうと、昭和 58 年から 3 年をかけて造成されたものです。開発されつつあった武蔵野の雑木林から土壌を移したので、土に混じって植物の根や種子、昆虫や土壌動物なども一緒に運びこまれ、ナナフシのように羽のない昆虫が定着するなど、下草、かん木、昆虫も含めて武蔵野の雑木林らしい構造を持った自然が復元できました。」

このように、二の丸雑木林の最大の特色は、森林の存在しなかった馬場に、「土壌」そのものを移し、クヌギ、コナラ、イロハモミジ等の苗木を植栽し、森をゼロから育てていったことにあります。大木を移植して“即席の森”をつくるのではなく、土壌の中に含まれている数百年に及ぶ生命の遺伝子を尊重し、そのまま丁寧に育てたことにあります。渋谷区の初台、代々木緑道は、江戸から続く玉川上水の土壌の上に、ケヤキなどの苗木を植栽し、半世紀をかけて育ててきたものですから、やはり“即席の森”ではないということが、共通しています。では、二の丸雑木林の現在の特色は、どのようなものなのでしょう。

2. 二の丸雑木林の特色：「微地形のデザイン」

二の丸雑木林の基本的構造は、「馬場」という平坦な地に、多摩の土壌を移し、微妙な地形のアンジュレーションを創り出したことにあります。写真 6、7 をご覧ください。緩やかに波打つ微地形がつくられていることがわかります。写真の遠方が低いレベルのため、見通しのよい林となっていることからわかります。この二つの写真は、ほぼ同じ場所の風景です。

写真 6 は 4 月 7 日で、雑木林は芽吹いた頃で、明るい林床にはヤマツツジ、カタクリ（写真 8）が、林縁にはタチツボスミレ（写真 9）が咲いています。

写真 7 は、7 月 16 日で、雑木林は深い緑陰となり、猛暑の中で、訪れる人々に涼しく爽やかな風を送ってくれます。木漏れ日の揺れる陽だまりにはヤマユリ（写真 10）が咲いています。

このように、武蔵野の自然は、そこに咲く野草や昆虫などにより、季節の移ろいを私たちに伝えてくれます。



写真 6 二の丸雑木林 2026 年 4 月 7 日

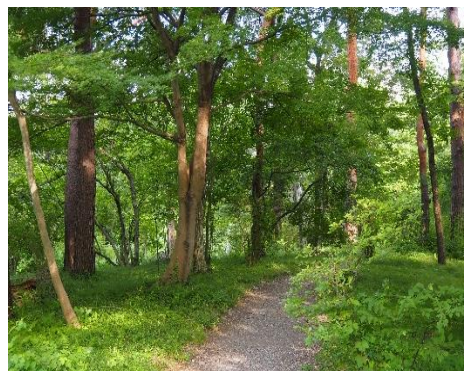


写真 7 二の丸雑木林 2026 年 7 月 16 日



写真 8 カタクリ



写真 9 タチツボスミレ
2026 年 4 月 7 日



写真 10 ヤマユリ
2026 年 7 月 16 日

3. 生物多様性の宝庫

緩やかなアンジュレーションによる「微地形」のデザインは、森の水循環を支える基本的構造となっています。写真 6, 7 は、樹林内の散策路です。幅員 1m ほどの土系舗装で、隣接する樹林地より、やや低い位置に設けられています。落葉広葉樹の雨水浸透能は、関東ローム層では、215～230mm/h で³⁾、森林が吸収できない雨水は、一段低い園路に流れ、森林内の湛水による根腐れを防ぎ、健全な根系を維持する機能を有しています。

多様な生物の生息環境も創り出されてきました。写真 11 は、緩やかな坂を下った所に広がる明るい草原です。ススキ、萩（写真 12）等の陽光を必要とする植物が生育していることがわかります。

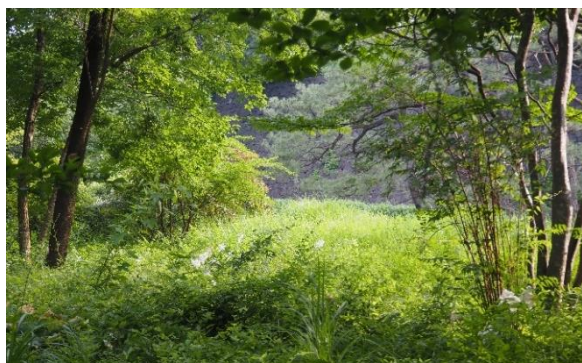


写真 1 1 明るい草地

（林縁にはヤマユリの群落が広がる）



写真 1 2 ハギ

このように、「微地形のデザイン」を導入することにより、様ざまの生物の生息地が創り出されています。この生息地は、生態学で「エコトープ (Ecotope)」と呼ばれるもので、立地の有する地形・地質・土壌などの非生物的因子と植物・昆虫などの生物的因子を統合し、等質な空間単位を持つ場所を意味します。

二の丸雑木林の場合、次のような多様なエコトープが出現しています。

- ① 落葉広葉樹林内のエコトープ：樹林地は階層的構造を有しています。クヌギ・コナラ・イヌシデ・イロハモミジ・ヤマボウシなどの高木層、中木・低木層には、ヤマモミジ・ウグイスカグラ・ガマズミ・コゴメウツギ・ニシキギ等の花や果実が美しく、野鳥や昆虫が好む樹木が植えられています。林床には、カタクリ・エビネ・キンラン・ギンラン・チゴユリなどが早春から 5 月上旬にかけて咲きます（写真 6～8）。
- ② 落葉広葉樹林林縁のエコトープ：園路沿いの日当たりのより立地で、タチツボスミレ（写真 9）、ホタルブクロ（写真 13）、オカトラノオ、コオニユリ（写真 14）等が咲きます。

- ③ 落葉広葉樹林の湿地のエコトープ：湿潤なエリアでは、ハンゲショウ（写真 15）やミズヒキなどが生育しています。
- ④ 明るい草原のエリアのエコトープ：樹林がなく、陽光の降り注ぐ草地で、ススキ、萩などが生育しています（写真 11～12）。
- ⑤ モウソウ竹林のエコトープ：関東地方で普通にみられるモウソウ竹林が、区画を別にして整備されています（写真 16）。

このように、多様なエコトープが、モザイク状に成立することにより、雑木林のエコシステム（Ecosystem）が長い年月を経て形成されてきたことがわかります。これは、今日、一般的に導入されている景観生態学（Landscape Ecology）⁴⁾の基本となるもので、当時はエコトープや生物多様性という概念自体、ほとんどありませんでしたので、郷土の雑木林の構造を深く読み解くことにより創り出された「革新的デザイン」ということができます。

この「野の花だより」で、お届けしてきた玉川上水に咲く野草が、都心の皇居でも、生き生きと生育していることがわかります。

また、「秋の七草」も、山上憶良の歌を引用し、植栽が行われています（写真 17）。このように文化を尊重する自然環境の再生は、現在の明治神宮内苑に 400 年にわたり維持・継承されてきた「井伊家林泉」の理念と共通するものです⁵⁾。



写真 13 ホタルブクロ



写真 14 コオニユリ



写真 15 ハンゲショウ



写真 16 モウソウ竹林



写真 17 秋の七草
（萩、ススキ、オミナエシ、フジバカマ他）

4. 休憩施設（ベンチ）

皇居東御苑で特段の配慮が払われているのが、休憩施設のベンチです。二の丸雑木林を背景とし、二の丸庭園を望む位置にゆったりとした背もたれのあるベンチが設けられており、座るだけではなく、そこから見える景色に細心の配慮が行われています。



写真18 皇居東御苑のベンチ

木製で、緩やかな背もたれがあり、猛暑日でも座ることができます。足元はウッドチップ。色彩は茶色で、風で飛散することはありません。

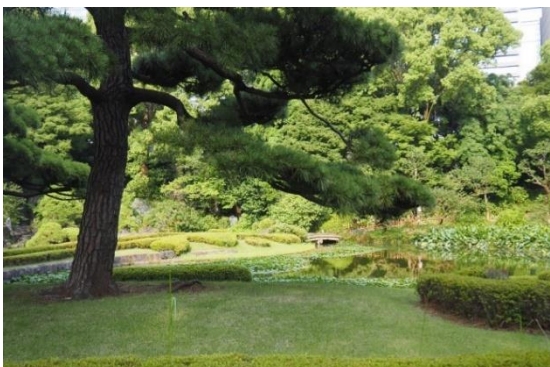


写真19 ベンチからみえる景観

ベンチの設計において、重要なことは、座り心地と並んで、そこから見える景観に配慮することにあります。ここでは、近景のクロマツが額縁となり、池、橋、背景の滝のある樹林地が奥行のある景観を生み出しており、その背後に丸の内のビル群が見え隠れする構造となっています。

以上、皇室の苑地として、半世紀前に、ゼロから新たに創り出された「二の丸雑木林」ですが、東京で急速に失われていった「普段着の自然環境」を、都心において再生し、生物多様性の宝庫となっていることがわかります。

出所

- 1) 日本イコモス国内委員会：「江戸・東京400年の文化資産である玉川上水の歴史と文化の保全と継承に向けた提言」2026年1月5日, <https://icomos-japan.org/>
- 2) 日本イコモス国内委員会の提言を踏まえた区の見解 2026年1月9日 https://files.city.shibuya.tokyo.jp/assets/12995aba8b194961be709ba879857f70/114ba3a38a5746d6805aae7b459f97c7/20260109_teigen_kenkai.pdf
- 3) 吉田葵、林誠二、石川幹子(2013)「都市緑地における種組成の差異が雨水涵養機能に与える影響に関する研究—新宿区立おとめ山公園を対象として」日本都市計画学会 Vol. 48 No. 3, pp. 1011-1016.
- 4) Richard T. T. Forman (1995), *Land Mosaics*, Cambridge University Press.
- 5) 石川幹子 (2005):『緑地と文化』、岩波書店